

線形代数学III 講義メモ (その3)

野呂 正行

1 行列のベキ

正方行列 A が対角化可能のとき, 変換行列 P により $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda_1 & & \\ & \ddots & \\ & & \lambda_n \end{pmatrix}$ とすれば

$P^{-1}A^kP = (P^{-1}AP)^k = \begin{pmatrix} \lambda_1^k & & \\ & \ddots & \\ & & \lambda_n^k \end{pmatrix}$ より $A^k = P \begin{pmatrix} \lambda_1^k & & \\ & \ddots & \\ & & \lambda_n^k \end{pmatrix} P^{-1}$ と書ける. A が

対角化可能でなくても, ジョルダン標準形のベキが計算できれば A^k の一般形を求めることができる.

定理 1.1 $J_k(\lambda)^i = \begin{pmatrix} \lambda^i & \binom{i}{1}\lambda^{i-1} & \cdots & \binom{i}{k-1}\lambda^{i-k+1} \\ & \lambda^i & \cdots & \binom{i}{k-2}\lambda^{i-k+2} \\ & & \ddots & \vdots \\ & & & \lambda^i \end{pmatrix}$

証明. E_j を j 次単位行列とすると $J_k(\lambda) = \lambda E_k + N$, $N = \begin{pmatrix} O & E_{k-1} \\ 0 & O \end{pmatrix}$ で, $E_k N = N E_k$

より $J_k(\lambda)^i = \lambda^i E_k + \binom{i}{1}\lambda^{i-1}N + \cdots + \binom{i}{k-1}\lambda^{i-k+1}N^{k-1}$. $N^j = \begin{pmatrix} O & E_{k-j} \\ O & O \end{pmatrix}$ ($j < k$), $N^j = O$ ($j \geq k$) より $J_k(\lambda)^i$ は上の形になる. (証明終)

例 1.2 $A = \begin{pmatrix} -2 & -1 & -1 \\ 8 & 4 & 2 \\ 6 & 2 & 3 \end{pmatrix}$, $P = \begin{pmatrix} 1 & -2 & 1 \\ -2 & 4 & 0 \\ -1 & 4 & -2 \end{pmatrix}$, $P^{-1} = \begin{pmatrix} 2 & 0 & 1 \\ 1 & \frac{1}{4} & \frac{1}{2} \\ 1 & \frac{1}{4} & 0 \end{pmatrix}$ により $J =$
 $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 1 \\ 0 & 0 & 2 \end{pmatrix}$, $J^k = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 2^k & k2^{k-1} \\ 0 & 0 & 2^k \end{pmatrix}$, $A^k = \begin{pmatrix} -(k+1)2^k + 2 & -\frac{1}{2}k2^k & -2^k + 1 \\ (2k+4)2^k - 4 & (k+1)2^k & 2 \cdot 2^k - 2 \\ (2k+2)2^k - 2 & k2^k & 2 \cdot 2^k - 1 \end{pmatrix}$.

2 定数係数同次線形差分方程式系

$x = (x(k))_{k=0,1,\dots}$ ($x(k) \in \mathbb{C}^n$) を \mathbb{C}^n に値をとる数列とする. このような数列全体は, $(x(k)) + (y(k)) = (x(k) + y(k))$, $c(x(k)) = (cx(k))$ ($c \in \mathbb{C}$) により \mathbb{C} 線形空間となる. $A \in M_n(\mathbb{C})$ に対し,

$$x(k+1) = Ax(k) \quad (k = 0, 1, \dots) \quad (1)$$

を定数係数同次線形差分方程式系という. (1) を満たす数列 x を (1) の解という. (1) の解全体を S とおく.

定理 2.1 S は n 次元の \mathbb{C} 線形空間をなす. $E = (x_1, \dots, x_n)$ ($x_1, \dots, x_n \in S$) として $(x_1(0), \dots, x_n(0))$ が \mathbb{C}^n の基底になるものをとれば E は S の基底となる.

証明. $x, y \in S, c_1, c_2 \in \mathbb{C}$ ならば $z = c_1x + c_2y$ により数列 z を定めれば $Az(k) = A(c_1x(k) + c_2y(k)) = c_1Ax(k) + c_2Ay(k) = c_1x(k+1) + c_2y(k+1) = z(k+1)$ より $z \in S$. よって S は \mathbb{C} 線形空間である. $\phi: S \rightarrow \mathbb{C}^n$ を $\phi(x) = x(0)$ で定めれば, ϕ は線形写像である. このとき, $\phi(x) = x(0) = 0$ ならば, 任意の k に対し $x(k) = 0$ より ϕ は単射. また, 任意の $v \in \mathbb{C}^n$ に対し $x(k) = A^k v$ により数列 x を定めれば, $x \in S$ より ϕ は全射. よって $S \simeq \mathbb{C}^n$. この同型により $x_1, \dots, x_n \in S$ が S の基底 $\Leftrightarrow \phi(x_1), \dots, \phi(x_n)$ が \mathbb{C}^n の基底 $\Leftrightarrow x_1(0), \dots, x_n(0)$ が \mathbb{C}^n の基底. (証明終)

定理 2.2 P を正則行列とする. $B = P^{-1}AP$ に対し PB^k の第 j 列 $x_j(k)$ により定まる数列 $x_j = (x_j(k))_{k=0,1,\dots}$ ($j = 1, \dots, n$) は S の基底をなす.

$PB^k = (x_1(k) \ x_2(k) \ \dots \ x_n(k))$ で, $PB^{k+1} = PBP^{-1}PB^k = APB^k$ より $x_j(k+1) = Ax_j(k)$ だから $x_1, \dots, x_n \in S$. また $x_j(0)$ は P の第 j 列に等しく, P が正則より, 前定理より (x_1, \dots, x_n) は S の基底.

系 2.3 A のジョルダン標準形を J , 変換行列を P とする. PJ^k の第 j 列により定まる数列を x_j ($j = 1, \dots, n$) とすれば, (x_1, \dots, x_n) は S の基底.

A^k の各列は明らかに S の基底を与えるが, A^k の計算には P^{-1} が必要となる. 系により, 基底を求めるためには P^{-1} は不要であることがわかる.

例 2.4 $A = \begin{pmatrix} 1 & 4 & 4 \\ 0 & -2 & -1 \\ 0 & 1 & 0 \end{pmatrix}$, $x(k) = \begin{pmatrix} u(k) \\ v(k) \\ w(k) \end{pmatrix}$ とするとき, $x(k+1) = Ax(k)$ の解空間

の基底を求める. $P = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & -1 & -1 \end{pmatrix}$ とすると $J = P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & 1 \\ 0 & 0 & -1 \end{pmatrix}$. $J^k =$

$\begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & (-1)^k & k(-1)^{k-1} \\ 0 & 0 & (-1)^k \end{pmatrix}$ より $PJ^k = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 2(-1)^k \\ 0 & (-1)^k & -k(-1)^k \\ 0 & -(-1)^k & (k-1)(-1)^k \end{pmatrix}$. よって, $x_1(k) = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$,

$x_2(k) = \begin{pmatrix} 0 \\ (-1)^k \\ -(-1)^k \end{pmatrix}$, $x_3(k) = \begin{pmatrix} 2(-1)^k \\ -k(-1)^k \\ (k-1)(-1)^k \end{pmatrix}$ とおくと, (x_1, x_2, x_3) は解の基底.

3 高階差分方程式

数列 $(u(k))_{k=0,1,\dots}$ ($u(k) \in \mathbb{C}$) に対する方程式

$$u(k+n) + a_{n-1}u(k+n-1) + \dots + a_1u(k+1) + a_0u(k) = 0 \quad (a_i \in \mathbb{C}, a_0 \neq 0) \quad (2)$$

を n 階斉次線形差分方程式と呼ぶ. この方程式は,

$$x(k) = \begin{pmatrix} u(k) \\ \vdots \\ u(k+n-1) \end{pmatrix}, A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & & \\ & \ddots & \ddots & \\ & & 0 & 1 \\ -a_0 & \cdots & -a_{n-2} & -a_{n-1} \end{pmatrix} \text{とおくと } \mathbb{C}^n \text{ に値をとる数}$$

列 $(x(k))$ に対する方程式

$$x(k+1) = Ax(k) \quad (3)$$

の解となる. 逆に (3) の解の第一成分は (2) の解となり, (2) と (3) の解は 1 対 1 に対応する. よって (3) を解けばよいが, 以下で示すような簡便法がある.

(2) の解全体を V とおくと, V は \mathbb{C} 線形空間となる. (2) の解 $(u(k))$ は, 初期値 $(u(0), \dots, u(n-1)) \in \mathbb{C}^n$ を与えれば一意に決まるので, $V \simeq \mathbb{C}^n$ である. $u_i = (u_i(k))$ ($i = 0, \dots, n-1$) を $u_i(j) = \delta_{ij}$ ($j = 0, \dots, n-1$) により定まる解とすれば, $E = (u_0, \dots, u_{n-1})$ は V の基底となる.

さて, $x = (x(k)) \in V$ に対し $Tx = (x(k+1))$ と定めれば, $Tx \in V$ である. T は \mathbb{C} -線形で, $T: V \rightarrow V$ の E による表現行列は A に等しい.

定理 3.1 $p_A(t) = m_A(t) = t^n + a_{n-1}t^{n-1} + \cdots + a_1t + a_0$ が成り立つ.

証明略.

系 3.2 $p_A(t) = m_A(t) = (t - \lambda_1)^{m_1} \cdots (t - \lambda_l)^{m_l}$ ($\lambda_1, \dots, \lambda_l$ は相異なる) とすれば, A のジョルダン標準形は
$$\begin{pmatrix} J_{m_1}(\lambda_1) & & \\ & \ddots & \\ & & J_{m_l}(\lambda_l) \end{pmatrix}$$

一般固有空間分解により $V = V(T, \lambda_1) \oplus \cdots \oplus V(T, \lambda_l)$ なので, 各 $V(T, \lambda_i)$ の基底を求めて集めれば V の基底を得る.

定理 3.3 λ を固有値, m その $p_A(t)$ における重複度とするとき, $v_i = (v_i(k))$ ($i = 0, \dots, m-1$), $v_i(k) = k^i \lambda^k$ とすれば (v_0, \dots, v_{m-1}) は $V(T, \lambda)$ の基底.

証明. 1. $v_i \in V$.

$u = v_i$ とすると

$$(2) \text{ の左辺} = (k+n)^i \lambda^{k+n} + a_{n-1}(k+n-1)^i \lambda^{k+n-1} + \cdots + a_0 k^i \lambda^k \quad (4)$$

である. ここで,

$$f(t) = t^k p_A(t) = t^{n+k} + a_{n-1} t^{n+k-1} + \cdots + a_0 t^k$$

とおくと,

$$t \frac{d}{dt} f(t) = (n+k)t^{n+k} + (n+k-1)a_{n-1}t^{n+k-1} + \cdots + ka_0t^k.$$

これを繰り返して,

$$\left(t \frac{d}{dt} \right)^i f(t) = (n+k)^i t^{n+k} + (n+k-1)^i a_{n-1} t^{n+k-1} + \cdots + k^i a_0 t^k$$

を得る. すなわち (4) の右辺は $(t \frac{d}{dt})^i f(t)$ の t に λ を代入したものである. ここで, $f(t) = t^k p_A(t)$ は $(t - \lambda)^m$ で割り切れるから, $i < m$ のとき $(t \frac{d}{dt})^i f(t)$ は $(t - \lambda)^{m-i}$ で割り切れる. よって $t = \lambda$ において $(t \frac{d}{dt})^i f(t) = 0$, すなわち $v_i \in V$ である.

2. $(T - \lambda)^{i+1} v_i = 0$ ($i = 0, \dots, m - 1$).

i に関する帰納法で示す. $i = 0$ のとき, $(Tu_0)(k) = \lambda^{k+1}$ より $Tu_0 = \lambda u_0$. よって $(T - \lambda)u_0 = 0$ より $u_0 \in V(T, \lambda)$. $i - 1$ まで OK とする: $(T - \lambda)u_0 = 0, \dots, (T - \lambda)^i u_{i-1} = 0$.

$$Tu_i(k) - \lambda u_i(k) = (k + 1)^i \lambda^{k+1} - k^i \lambda^{k+1} = \sum_{j=0}^{i-1} \binom{i}{j} k^j \lambda^{k+1}$$

$(T - \lambda)u_i = \sum_{j=0}^{i-1} \binom{i}{j} \lambda u_j$. よって, 帰納法の仮定により $(T - \lambda)^{i+1} u_i = \sum_{j=0}^{i-1} \binom{i}{j} \lambda (T - \lambda)^i u_j = 0$ となり, i でも成り立つ.

3. (v_0, \dots, v_{m-1}) は $V(T, \lambda)$ の基底.

$\dim V(T, \lambda) = m$ より, (v_0, \dots, v_{m-1}) が一次独立であることを言えばよい. $c_0 v_0 + \dots + c_{m-1} v_{m-1} = 0$ とする. $(T - \lambda)^{m-1}$ を作用させれば 2. より $(T - \lambda)^{m-1} v_i = 0$ ($i = 0, \dots, m - 2$) より $c_{m-1} (T - \lambda)^{m-1} v_{m-1} = 0$. ここで, 再び 2. より $(T - \lambda)^{m-1} v_{m-1} = c u_0$ ($\exists c \neq 0$) がわかるので $c_{m-1} = 0$. 以下これを繰り返し $c_{m-2} = \dots = c_0 = 0$ がいえる. (証明終)

以上をまとめて次をうる.

定理 3.4 方程式 (2) に対し, $t^n + a_{n-1} t^{n-1} + \dots + a_0$ (特性方程式) の根を $\lambda_1, \dots, \lambda_l$, 重複度をそれぞれ m_1, \dots, m_l とすれば, $\{(\lambda_1^k), \dots, (k^{m_1-1} \lambda_1^k), \dots, (\lambda_l^k), \dots, (k^{m_l-1} \lambda_l^k)\}$ は解空間の基底をなす.

4 行列の指数関数

$M_n(\mathbb{C})$ を n^2 次元の \mathbb{C} 線形空間と考え, $A = (a_{ij})$ のノルム (長さ) $\|A\|$ を $\sqrt{\sum_{i,j} |a_{ij}|^2}$ で定義する. また, $x = (x_i) \in \mathbb{C}^n$ については $\|x\| = \sqrt{\sum_i |x_i|^2}$ と定義する.

定理 4.1 1. $\|cA\| = |c| \|A\|$ ($c \in \mathbb{C}$).

2. $\|A + B\| \leq \|A\| + \|B\|$.

3. $\|Ax\| \leq \|A\| \|x\|$ ($x \in \mathbb{C}^n$).

4. $\|AB\| \leq \|A\| \|B\|$.

注意 4.2 教科書 p.262 のように, $\|A\| = \max_{\|x\|=1} \|Ax\|$ と定義しても同様の性質をもつ. 以下の議論では, どちらのノルムを用いてもよい.

ノルムを使って $d(A, B) = \|A - B\|$ により $M_n(\mathbb{C})$ に距離が定義できる. この距離により $M_n(\mathbb{C})$ は完備な距離空間 (コーシー列が収束する) となる. 特に, 行列の収束に関して次は有用である.

定理 4.3 $\|A_i\| \leq \alpha_i$ かつ $\sum \alpha_i$ が収束すれば $\sum A_i$ も収束する.

定理 4.4 $A \in M_n(\mathbb{C})$ に対し $\sum_{i=0}^{\infty} \frac{1}{i!} A^i = E + \frac{1}{1!} A + \frac{1}{2!} A^2 + \dots$ は収束する. その和を $\exp(A)$ と書く.

証明. $\|\frac{1}{i!} A^i\| \leq \frac{1}{i!} \|A\|^i$ で $\sum_{i=0}^{\infty} \frac{1}{i!} \|A\|^i$ は収束するから前定理により OK. (証明終)

定理 4.5 1. $AB = BA$ ならば $\exp(A + B) = \exp(A) \exp(B)$.

2. $\exp(-A) = (\exp(A))^{-1}$.

3. $\exp(P^{-1}AP) = P^{-1} \exp(A)P$.

4.
$$\exp \begin{pmatrix} A_1 & & \\ & \ddots & \\ & & A_k \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \exp(A_1) & & \\ & \ddots & \\ & & \exp(A_k) \end{pmatrix}$$

定理 4.6 $\exp tJ_k(\lambda) = e^{\lambda t} \begin{pmatrix} 1 & t & \cdots & \frac{t^{k-1}}{(k-1)!} \\ & 1 & \cdots & \frac{t^{k-2}}{(k-2)!} \\ & & \ddots & \vdots \\ & & & 1 \end{pmatrix}$.

証明. $J_k(\lambda) = \lambda E + N$, $N = \begin{pmatrix} 0 & 1 & & \\ & \ddots & \ddots & \\ & & 0 & 1 \\ & & & 0 \end{pmatrix}$ より $(tJ_k(\lambda))^i = t^i \sum_{j=0}^i \binom{i}{j} \lambda^{i-j} N^j$. 実際には

はこの和は $j \leq \min(i, k-1)$ までの和である. よって,

$$\sum_{i=0}^{\infty} \frac{1}{i!} (tJ_k(\lambda))^i = \sum_{j=0}^{k-1} N^j \sum_{i=j}^{\infty} \frac{1}{i!} \binom{i}{j} t^i \lambda^{i-j} N^j = \sum_{j=0}^{k-1} \frac{1}{j!} N^j \sum_{i=j}^{\infty} \frac{1}{(i-j)!} (\lambda t)^{i-j} = e^{\lambda t} \sum_{j=0}^{k-1} \frac{1}{j!} t^j N^j.$$

(証明終)

系 4.7 $A \in M_n(\mathbb{C})$ に対し $\exp tA$ が, A のジョルダン標準形により計算できる.

5 定数係数斉次線形常微分方程式系

$A = (a_{ij}) \in M_n(\mathbb{C})$ に対し, n 個の未知関数 $x_i(t)$ に関する方程式

$$\frac{dx_i}{dt} = \sum_{j=1}^n a_{ij}x_j \quad \text{あるいは} \quad \frac{dx}{dt} = Ax \quad \left(x = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}\right) \quad (5)$$

を定数係数斉次線形常微分方程式系と呼ぶ.

定理 5.1 $A \in M_n(\mathbb{C})$ に対し $A(t) = \exp(tA)$ とおくと, $\frac{d}{dt}A(t) = A \cdot A(t)$.

証明. $A^k = (a_{ij}^{(k)})$ とおけば $\exp(tA)$ の絶対収束性より $A(t)$ の (i, j) 成分 $A_{ij}(t) = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} a_{ij}^{(k)} t^k$

も絶対収束する. よって, 項別微分可能で $\frac{d}{dt}A_{ij}(t) = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{(k-1)!} a_{ij}^{(k)} t^{k-1} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} a_{ij}^{(k+1)} t^k$ よ

り $\frac{d}{dt}A(t) = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} A^{k+1} t^k = A \cdot A(t)$. (証明終)

定理 5.2 任意の $c \in \mathbb{C}^n$ に対し, $x(t) = \exp(tA)c$ は (5) の $x(0) = c$ を満たす一意解を与える.

証明. $\frac{dx}{dt} = A \exp(tA)c = Ax$, $x(0) = \exp(0 \cdot A)c = c$ より $x(t)$ は $x(0) = c$ なる解である. 一意性を示す. $y(t)$ も $y(0) = c$ なる解とする. $z = \exp(-tA)y$ とおくと, $\frac{dz}{dt} = -A \exp(-tA)y + \exp(-tA)Ay = 0$ かつ $z(0) = y(0) = c$ より $z(t) \equiv c$. すなわち, $y = \exp(tA)c$ となり $x = y$ である. (証明終)

系 5.3 (5) の解空間 S は $S \ni x(t) \mapsto x(0) \in \mathbb{C}^n$ により \mathbb{C}^n と同型で, $P \in M_n(\mathbb{C})$ が正則なら $\exp(tA)P$ の列ベクトル全体は S の基底となる. 特に, $J = P^{-1}AP$ なら $\exp(tA)P = P \exp(tJ)$ より $P \exp(tJ)$ の列ベクトル全体は S の基底となる.

6 高階斉次線形常微分方程式

スカラー値の未知関数 ($u(t)$ に対する方程式

$$u^{(n)} + a_{n-1}u^{(n-1)} + \cdots + a_1u' + a_0u = 0 \quad (a_i \in \mathbb{C}, a_0 \neq 0) \quad (6)$$

を n 階斉次線形常微分方程式と呼ぶ. この方程式は,

$$x = \begin{pmatrix} u \\ \vdots \\ u^{(n-1)} \end{pmatrix}, \quad A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & & \\ & \ddots & \ddots & \\ & & 0 & 1 \\ -a_0 & \cdots & -a_{n-2} & -a_{n-1} \end{pmatrix} \quad \text{とおくと } \mathbb{C}^n \text{ に値をとる関数 } x \text{ 対}$$

する方程式

$$\frac{dx}{dt} = Ax \quad (7)$$

の解となる. 逆に (7) の解の第一成分は (6) の解となり, (6) と (7) の解は 1 対 1 に対応する. よって (7) を解けばよいが, 高階差分方程式と同様, 以下のように解が計算できる.

(6) の解全体を V とおくと, V は \mathbb{C} 線形空間となる. (6) の解 u は, 初期値 $(u(0), \dots, u^{(n-1)}(0)) \in \mathbb{C}^n$ を与えれば一意に決まる (これは, (7) の解との 1 対 1 対応からわかる). よって $V \simeq \mathbb{C}^n$ である. $u_i(t)$ ($i = 0, \dots, n-1$) を $u_i^{(j)}(0) = \delta_{ij}$ ($j = 0, \dots, n-1$) により定める解とすれば, $E = (u_0, \dots, u_{n-1})$ は V の基底となる.

さて, $x \in V$ に対し $Tx = x'$ と定めれば, $Tx \in V$ である. T は \mathbb{C} -線形で, $T: V \rightarrow V$ の E による表現行列は A に等しい.

定理 6.1 $p_A(t) = (t - \lambda_1)^{m_1} \cdots (t - \lambda_l)^{m_l}$ ($\lambda_1, \dots, \lambda_l$ は相異なる) とする. このとき, $B_i = \{e^{\lambda_i t}, te^{\lambda_i t}, \dots, t^{m_i-1}e^{\lambda_i t}\}$ は $V(T, \lambda_i)$ の基底である. よって $B = B_1 \cup \cdots \cup B_l$ は $V = V(T, \lambda_1) \oplus \cdots \oplus V(T, \lambda_l)$ の基底である.

証明. $f(x) = \sum c_i x^i$ ($c_i \in \mathbb{C}$) に対し, $f(\frac{d}{dt})u = \sum c_i \frac{d^i}{dt^i}u$ と定義すると, $f(x) = g(x)h(x)$ のとき $f(\frac{d}{dt})u = g(\frac{d}{dt})(h(\frac{d}{dt})u)$ が成り立つ. よって, $p_A(t) = (t - \lambda_1)^{m_1} \cdots (t - \lambda_l)^{m_l}$ ならば $u^{(n)} + a_{n-1}u^{(n-1)} + \cdots + a_1u' + a_0u = p_A(\frac{d}{dt})u = \prod_{j \neq i} (\frac{d}{dt} - \lambda_j)^{m_j} ((\frac{d}{dt} - \lambda_i)^{m_i}u)$. $u = t^k e^{\lambda_i t}$ ($k < m_i$) とすれば, $(\frac{d}{dt} - \lambda_i)u = kt^{k-1}e^{\lambda_i t}$ より $(\frac{d}{dt} - \lambda_i)^{m_i}u = 0$. これは, $u \in V$ かつ $u \in V(A, \lambda_i)$ を意味する. B_i が一次独立であることも明らかである. (証明終)